

深谷市の地形

深谷市の地形は、市域のほぼ中央を東西に走るJR高崎線を境として、南に櫛挽台地、北に妻沼低地が広がっています。

標高差は市南西の鐘撞堂山から妻沼低地の利根川河川敷まで約300mあります。

南に広がる櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居町付近を頂部としています。

櫛挽台地は構造的には、ほぼ東通り線（県道深谷東松山線）あたりを境に、西側が櫛挽面（櫛挽段丘）、東側が寄居面（御稜威ヶ原段丘）と呼ばれる段丘状に形成されています。

櫛挽面は、寄居を頂上にして北東方向に三角形状に広がります。末端は高崎線に沿う形で終わります。台地面の平均勾配は5.5%ですが、末端10%以上の急勾配になっていることが特徴です。

末端に近い部分では、第三紀※の残丘である仙元山（標高98.0m）が、また市の南西端、寄居町との境には鐘撞堂山（標高330.2m）がそびえます。

御稜威ヶ原面は、櫛挽面を削剥してできた侵食段丘です。平均勾配は5%で櫛挽面よりやや緩くなっています。



市北部に広がる妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地です。この低地は東西に長く、南の櫛挽台地、北の伊勢崎の台地の間にあります。とくに南側の崖線は御稜威ヶ原段丘を切るもので、深谷断層とよばれています。

南東は熊谷市付近を境として、荒川低地に続き、東は加須低地に接します。妻沼低地は現在ではほとんど平坦ですが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防や後背湿地が発達しています。

※第三紀
約7000万年前から約170万年前まで、地質時代でいえば新生代の初めから中頃までの時代。火山活動や造山運動が盛んで、アルプス・ヒマラヤなどの大山脈ができた。日本列島の形もこの時代につくられたといわれる。新生代の末期、約170万年前から現在に至る時代は第四紀に属する。